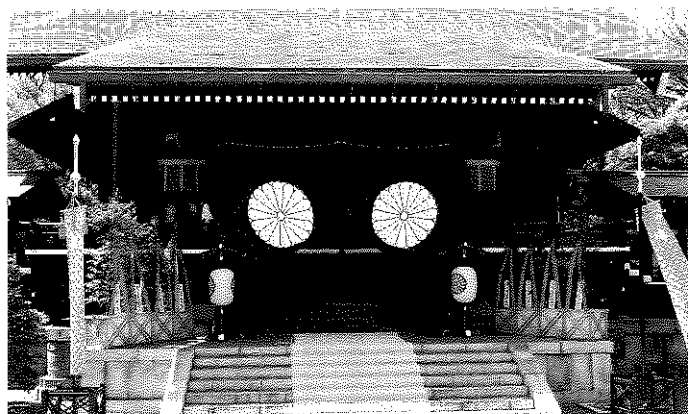


# 靖國神社春季例大祭に 参列して

清水 典郎 陸士61

東京に生まれ育つて88年、途中17年の関西暮らしがあったが、物心ついてから靖國神社は絶えず念頭から離れなかった。

祖母に連れられて参拝することが多く、明治12年に東京招魂社から靖國神



社となつてゐるのに、明治13年生まれの祖母は、いつまでも招魂社と言つていた。

昭和3年生生まれの私にとつて、昭和6年の満洲事変、昭和7年の上海事変は、どこかで戦が始まつてゐる程度の認識、僅かに廟行鎮の爆弾三勇士の話を知つて、凄いことをする兵隊さんがいると強烈な印象を得た。

昭和12年、小学校3年時には盧溝橋事件に端を発する支那事変、続いて昭和16年、中学校1年時には米英に対する宣戦布告、父の従弟、母の弟、その他縁戚の応召があつて、戦争を身近に感じるようになった。

昭和19年、中学校4年生になると同時に陸士、海兵受験を思い立つた。

陸士に合格、昭和20年2月に着校、4月に入校した。

前年7月にサイパンが敵手に陥ち、11月から空襲が本格化し、昭和20年3月、5月に東京、その他、全国的に戦災が広がるにもかかわらず元寇の時と同じ神風を信じて疑わなかつた。

朝霞の予科士官学校から群馬県新鹿沢の浅間演習隊に移動の途中、昭和20年8月9日、赤羽駅近くで、2発目の長崎原爆、火事場泥棒そのもののソ連の満洲侵略を知り、この時初めて俺はもう永くないな、名誉の戦死がもうそこまで来ているなと感じた。

あと半年、いや3カ月続いたら私も今ここに立つておらず、御祭神となつていたかも知れない。

纏々記したこと、靖國神社参拝時に必ず頭をよぎる感慨である。

さて、今回の例大祭。「当日祭」にしようしても参列できず、初めて「第二日祭」(4月23日)に参列した。

当日祭に比較すると昇殿参拝参列者も少ないが、それでも拝殿一杯、所狭しとばかりの参列者の数に熱気を感じるものがあつた。

式次第は当日祭にある勅使の参向以外は全く同じである。

国歌斉唱、降神の儀の警蹕、宮司の祝詞奏上と度々起立。献饌の儀、「鎮魂頌」「靖國神社の歌」合唱の際には着座。

宮司玉串を奉りて拝礼の後、崇敬者総代が本殿に進み拝礼された。この日は阿南惟正様と島津肇子様のお二人であつた。

ここで徳川宮司が挨拶に立たれた。靖國神社の桜の開花が全国のトップの3月21日、満開が4月3日、この辺から始められて、靖國神社の現状、崇敬奉賛会の状況へと進められ、神社創建百五十年記念事業へ移られた。休憩所の竣工、本殿のバリアフリー化、エレベーターの新設等、御神徳の宣揚が着々と進捗している状況を話された。

また、遊就館で戦国時代〜江戸時代の甲冑武具展を開催していることの紹介もされた。

終わつて、参列諸員本殿に進んで拝礼、退出。式次第どおりの11時であつた。

このところ閣僚、議員の参拝については一時程騒がしくないようである。第二日祭に参加した要人は少ないからかマスコミ人の姿を見かけなかつた。それにしても総理大臣の参拝が途絶えて久しい。昭和60年の中曽根首相の後、平成8年に橋本首相、その後は散発的に小泉首相、安倍首相の参拝、御祭神のことを何と考へてゐるのだろうか。

フィリピン人のドゥテルテ大統領、続いてアメリカのトランプ大統領、自国第一主義には問題ありとはいへ、日本人は優し過ぎて、また人がよすぎいけない。イギリス王・女王、アメリカ大統領が過去の侵略について謝罪したことはない。日本の総理も謝罪はしていないが、実質謝罪に近い言動を示している。自国の内政に問題があると、日本に予先を向け自国民を納得させようとする周辺国のトップ。こんな連中をいつまでも相手にしては行かれない。自主独立の気概をもつて立ち向かうのではないか。

靖國の英霊のためにも。